

平成29年 6月21日

浜田市議会議長 西田 清久 様

議員名 小川 稔宏



調査研究活動報告書

下記のとおり調査研究のため研修等を行ったので、その結果を報告します。

記

1. 期 間 平成29年6月5日（月）～7日（水）

2. 視察先及び研修テーマ

場所 北海道網走市内

○6月5日（月）

（1）東京農業大学 オホーツクキャンパス

内容「6次産業化・農商工連携」『オホーツクものづくり・ビジネス地域創成塾の取り組み』について

講師：渡部俊弘 副学長、菅原優 準教授

○6月6日（火）

（2）網走市立郷土博物館 説明：米村館長

（3）モヨロ貝塚館 説明：米村館長

（4）オホーツク流氷館 説明：流氷館ガイド

（5）網走刑務所 内容『刑務所と地域の関係と役割』

説明及び刑務所内案内：麓 学 網走刑務所長

（6）博物館網走監獄 見学

○6月7日（水）

（7）北海道立北方民族博物館 説明：館内ガイド

3. 参加者 牛尾 昭 芦谷英夫 江角敏和 岡野克俊

上野 茂 岡本正友 野藤 薫 小川稔宏

4. 調査経費 72,641円

5. 調査研究活動の概要 別紙



【調査の目的】

1. 東京農業大学では地域連携と6次産業化に力を入れている。浜田市にとって農林水産業での所得の増加と持続性の確保、地産地消や商工業の活性化による地域経済好循環が課題である。大学のある町という共通点もあり、大学の知見が地域貢献や経済効果に果たす役割について視察すること。

2. 網走市では人口3万8千人で財政規模は大きくないものの、5つの博物館が運営されている。地域文化の歴史や施設の経緯と運営状況および市民の意識や位置付け等を伺い、財政面や地理的問題等から現在再検討されている浜田歴史資料館整備の今後の方向性について参考にしたい。

3. 網走刑務所では全国で唯一黒毛和肉の畜産が行われ受刑者が生産した「網走監獄和牛」が高品質「A5」等級を獲得している。再犯防止の観点から刑務施設出所後の就職先や居場所作りの必要性が求められており、島根あさひ社会復帰促進センターを抱える浜田市にとっても重要な課題である。中間施設の整備促進のための参考とすること。以上を視察の目的とした。

1. 東京農業大学 オホーツクキャンパス

【概要説明の要旨】

○渡部俊弘副学長

《大学の歩み、特色について》

1891年徳川育英黌農業科を榎本武揚が創設、去年が125周年であった。

ボツリヌス菌の研究でボトックスやジストニア症など医療に使われている。

6次産業化、地域創生で地域に根ざし産業に特化した生物産業学部1学部で、1次産業に対しては生物生産学科、海は

アクアバイオ学科、2次産業に対しては食品科学科、3次産業では地域産業経済学科がある。

学生は1学年400人、計1600名で90%以上が本州からきており経済効果は6～7億といわれ地域に根ざしている。エミューの生産、加工から流通まで大学発のベンチャー企業を三者で行い1500羽は日本一。企業と学生、社会人が組んで、ものを作り本州のOBに売る「地産外消」に取り組んでいる。

厳しい自然と人柄に馴染んで90%以上の学生が満足し、起業する方もいるが、自立、人間力が増すという意味からも保護者のファンも多い。



○菅原優（地域産業経営学科）准教授
《「6次産業化・農工商連携」について》

地域活性化にはひと・もの・かねが重要といわれるが、なかでもひと＝人材育成が重要で学生だけでなく地域の社会人の方も含め「地域創成塾」をやっている。

東京農大の内発的ものづくり支援（人材育成事業）「オホーツクものづくり・ビジネス地域創成塾」という講座を2010年から受講生を受入れ、7期生まで、のべ121名が修了している。



北海道オホーツクは加工原料の農産物を作っている地域で、加工メーカー向けの原料となる小麦、馬鈴薯、ビート等を大規模、大量生産、低コストの農業経営になっているが農家に残る付加価値は低い。

6次産業化や自分でものづくりと売る能力を身につけ、地域活性化につなげる。優れた加工技術とマーケティング能力を備えて商品開発を進めるリーダー的人材を育成していく。

網走市の地域再生計画と連動させ文科省の補助事業としてスタートした。

公募制で募集したが、年代は50、40、30代で女性も多く、金融関係はお願いしたが、農家だけでなく公務員、サービス業飲食店関係、食品加工業等様々な職種の異業種連携となった。マーケティングだけでなく試食会イベント出店、販路開拓、販路拡大も行う。

新事業、新商品開発では12事業化、46商品化（2016年12月時点）され、女性起業家の増加、障害者雇用の拡大の成果もある。

受講生は最後の成果報告会に向けては事業計画作りに挑み、小泉武夫氏をはじめ金融、流通の方を招き厳正な審査を行われる。

地場産にこだわった商品開発が行われ、成功事例としては受講生の若手グループのでんぷん団子ギネス登録をきっかけに企業進出につながった例もある。うどん店「喜多夢楽（きたむら）」では障害者雇用を生みだし、シーフードグラタンは三越のギフトセットに採用されるなど、地域資源と人脈を活用したものづくりが行われている。

ものづくりの成果を地域の発展につなげていく道半ばで、次の世代の人材を育成していかなければいけない。大学では自治体、教育機関、業界等とも連携協定を結び学生にとって良い教育環境、地域の社会人にとっても気軽に学べる良い環境を作っている。高校・大学が菓子屋とのコラボでの商品開発もされ道の駅で販売されているが、大学が持っている資材と地域の職人の技術をミックスしてオンリーワンを作り持続させることが大事である。

【主な質疑応答】

Q 市単独での支援、補助金について

A スタートアップ支援やデザイン開発等ステージ支援メニューとも連動し年間 30 万位。他には網走信金が東京農大の技術支援を受けた商品開発を支援し 1 件 10 万、年間 5 件までがある。

Q：受講の時間について

A：6 時から 7 時 30 分、90 分 1 コマ。加工実習、販売実習は土曜半日使う。

Q：研修の期間について

A：はじめは 2 年研修だったが 1 年の研修になった。文科省の補助事業の 5 年間は年 2～3 千万出ていたが、今は大学と市が 500 万円ずつ出している。

Q：食料自給率は高いのか

A：1 次産品の産地としては十勝に次ぐ No. 2 の生産額だがオホーツクは海、畜産、畑のものと 3 つのバランスがとれている。

Q：網走では稲作が可能なのか。

A：寒冷地仕様のもち米で道東は冷涼地域で積算温度がクリア出来るのは北見市周辺だけ。米騒動で稲作が広がった時代もあったが冷害で畑作に戻った。

Q：信金の方はビジネスプランの助言をお願いしているのか。

A：アドバイザー、コーディネーターの役割を担ってほしいと思っている。

Q：年間 1,000 万は受講生に対するコストか

A：外部講師の旅費、謝礼、事務的な専門スタッフ 2 名の雇用。

Q：成果発表で優秀な人に 50 万、100 万渡すといった制度はないのか

A：修了証と記念品は渡していたが、開業資金的なものはなかった。

Q：フォローアップとして金融機関が入っていることでの実績はあるか

A：網走信金の 2012 年からの「産学連携事業助成」で採択事例はある。

Q：刑務所出所者のリスタートと農業の関係について大学との接点はどうか。

A：直接的にはないが、修了生が監獄で商品開発をしている人はいる。

Q：地方創生総合戦略により道東地域が元気になる傾向はあるのか

A：帯広は人口が増えているがおしなべて減っている。観光は微増。

Q：農業の高齢化は

A：農家の高齢化は若干低く後継者の確保率が高い。組合農協が中心となって畑作営農集団で機械利用組合を作り後継者を育成し定着させている。

Q：6 次産業化で地産地消がメインなのか、外部に目を向けているのか

A：両方の戦略でビジョンを中長期の視点でみてケースバイケースで。

Q：観光、グリーンツーリズムと農業の関係はどうか

A：新たな課題。本業との兼ね合いもあり、中間組織が窓口になって進めるのが良いのではと思う。

2. 網走市立郷土博物館

【概要説明の要旨】 米村館長から説明



昭和 11 年に北海道で最初の博物館として出来た田上義也氏のフランク・ロイド・ライト風建物。地域の歴史と自然を知ってもらうための施設で1階は自然、2階は歴史について展示している。道立北方民族博物館が出来るまでは入館者は5万人だったが今は5千人位で地元根ざした博物館となっている。

運営費は年間 800 万位で学芸員 2 名、館長、受付含め 4 人で運営。年 2 回特別展を開催し 45 万の予算がつく。ここが本館で分館としてモヨロ貝塚館がある。その他の施設としては発掘した埋蔵文化財等収蔵は古民家に、農機具や生活用品などは廃校を使っている。1 万点ほどの資料の収蔵場所に苦慮している。それらの中の良いものを展示しており総額 2500 万円で運営している。

冬は流水で海が真っ白になりアザラシやトドがやってくる。それをめざして古代人が樺太から移住してきたモヨロ貝塚は日本では特殊な場所である。モヨロ貝塚の出土品を展示するために、当初は住友の寄附で北見教育会が設立し後に網走市に移管した特異な経緯がある。(モヨロ貝塚を発見した米村喜男衛氏は、米村館長の祖父)



3. モヨロ貝塚館（網走市立郷土博物館分館）

【概要説明：米村館長】

モヨロ貝塚は網走川河口にある 1300 年前に暮らしたモヨロ人の村の跡で、北からの渡来した海洋狩猟民族モヨロ人の暮らしは「オホーツク文化」（5～9 世紀）と呼ばれる独特な文化を紹介している。モヨロ貝塚館ではモヨロの人びとの生活を住居、墓、貝塚のテーマごとに展示、解説がされている。

貝塚館は遺跡の上にあり平成 25 年 5 月の建替えでは文化庁からは史跡の外に出すよう言われたが他に場所がなくやむなくここに建てさせてもらったが厳しい規制や条件があった。整備費は約 5 億円、2 分の 1 が国、4 分の 1 が北海道から、残りが市で、そのうち 7 割は過疎債を使い、建設計画から完成までに 12 年かかった。



地元の愛着もあり貝塚地層展示を残そうとなったが文化庁から展示費用の補助はなく自分達で作った。1300 年前の地層と現在との間から出た人骨はアイヌで、モヨロはアイヌの人たちもより前の時代に暮らしていたことがわかる。

4. オホーツク流氷館 【概要説明の要旨】【説明：流氷館ガイド三島さん】

7 月末で新しくなって丸 2 年になる。建設経過は昭和 54 年に市が展望塔を建替、55 年、展望塔内に流氷展示を開始、昭和 60 年にオホーツク流氷館を増築。入館者はピーク時 38 万人、近年は約 13 万人。元の流氷館と並行して建設を進め建設費 16 億 3 千万円で平成 27 年 4 月新しく生まれ変わった。コンセプトは風景の美術館で階段も上り下りが交差し



ない作りになっている。売りは流氷と景観とのことである。館内にはプロジェクションマッピング、流氷幻想シアター、流氷体感テラスがあり、クリオネ等の展示もされている。「天の都にいる心地がする」という意味で名がついた「天都山」の頂上にあり屋上展望テラスからは 360° のパノラマが楽しめる。建替えの際に海の生物も展示している等で海の近くにとの意見もあったが、この立地は譲れなかったと力説されていたのが印象に残った。

5. 網走刑務所 【概要説明の要旨】麓学所長から説明を受ける。

P F I の島根あさひ社会復帰促進センターとは 180° 違い、明治初期から歴史のある刑務所で北海道独特のものを有する施設。高倉健の映画、網走番外地の影響で観光スポットになっており敷地内で写真も撮れる。敷地は広く 3 つの農場を抱え東京ドーム 351 個分でほとんどが山林。沿革として、北海道は受刑者が開拓した歴史がある。明治 23 年に釧路監獄署網走囚徒外役所として開設。



集治監を作り道路、護岸工事で特に網走から旭川の中央道路の事業にあたらせた。多くの収容者を抱えじゃがいもトウモロコシなど農作物を作り牛や羊、山羊を飼ったりの自給自足の生活をしていた。入植者も刑務所の技官から農業、酪農など教わり地域に根づいた歴史もある。大正11年に網走刑務所となり現在の建

物になったのは平成24年3月から。過酷な労働を強いられ収容者にも多くの死傷者が出るが、それに伴い職員も苦勞され病気やけがで亡くなっている歴史がある。組織は総務部、処遇部、分類教育部の3部制、と視察委員会がある。職員定員は287名 医療職3名のうち1名は常勤医師。収容定員1600名、4月30日現在835名。今820名くらい。単独室986、共同室105、 単独室の割合が62%。H19年頃から収容人員は減り最低を更新している。原因はよく分からないが、少年院も暴力団も減っている。イラン人、中国人収容者も減っている。この先増えないのではと思うが、刑務所の役割は減ることはなく、社会に出て悪いことをしないように教育することなので人数が多くても少なくても変わらない。

刑期は平均3年5ヶ月で実際の収容はもっと短い。罪名別では覚醒剤52.5% 窃盗27.4%。入所回数4.3回、最高は17回。平均年齢47歳。移送先は東京管内が81%、北海道内13%で、出る人の8割は東京管内に戻ることになる。

帰住先が遠方になるので調整がしづらく、地元の観察所や市町村と協力して就労支援や生活保護の手続きを円滑に進めるようにしている。59.2%が仮釈放。作業の内訳では木工、金属加工等は定番だが、丸太切ってきて製材し組み立て販売しているのは網走刑務所だけ。造林樹齢40年の木、植林もしており木はなくなる。農場ではじゃがいも 大根などの菜など農作物や黒毛和牛を作っている。エンジュの木を使ってニポポの製作、窯業の三昧焼きは人気がある。

二見ヶ岡農場では牧草で子牛から30ヶ月育て出荷しており、4月から13頭中半分がA5ランク。監獄和牛と呼ばれ、これも網走刑務所だけのもの。

職業訓練は4つ、建設機械、溶接、農業科、ビジネススキル科、資格取得も奨励しており、特別改善指導は薬物依存離脱指導など6つ用意している。

運動会やエグザイル桑田佳祐等の慰問もあった。北山墓地には慰霊碑があり、受刑者の無縁仏と殉職した職員の墓も一緒にあり、こうした例は珍しい。

正門前をスタートするオホーツク網走マラソンは今年で3回目、3000人が参加し今年も人気がある。累犯受刑者を収容している。郊外作業事業所を多く持っているので東京管内から郊外作業に耐えうる健康な男の受刑者を主に収容し

ている。広い農場、製材が大きな特徴である。

《説明の後刑務所内を見学》

【主な質疑応答】

Q：あさひ社会復帰促進センターでは再犯ゼロを目指し廃校を利用し支援をしようという動きがあり13日に研究会立上げが予定されている。地域と刑務所とのつながりは。



A：小学校から高校で薬物濫用防止の講話依頼があり、昨年も11回。ボランティアの会から出所後の生活計画や就職に役立つ本の寄贈がある。保護司等の見学などもある。

Q：施設内での訓練が社会の製造形態とマッチしているか、追跡調査は行われているか。

A：出所後の追跡は無理。作業だけでなく資格を取らせるよう提携するようにしている。通用する訓練に結びつけるよう努力している。期間的制約、区的制約があるなかで自信を持たすこと。農業やっけても農業に就く人は少ないが、規則正しい生活習慣を身につけることが大切だと思う。

Q：復帰者へ社会の偏見があることに対して

A：高齢、知的障害についてはケアするようになってきており特別調整がある。

Q：人権問題について、刑を終えた人への配慮についてはどうか。

A：彼らに甘い言葉は駄目。社会は厳しいということを教え目覚めさせる。何がきっかけで目覚めるか分からないから、いろんな働きかけを試してみる。甘い環境を提示することではない。

Q：再犯について、出所しても住む場所や仕事がないことが問題と言われるが、刑務作業で出所時の所持金はどれくらいなのか。

A：作業報奨金の計算し出所時に交付される。期間の長短、仕事の習熟度合いでピンからキリまである。2～3年勤めて2～3万あるかないか。帰る汽車賃が半額になる制度はある。出た次の日から生活に困ることがないように就職先もいるうちに決めるが、就職先に行かない。出たら頑張ろうと思うが塀を一旦出ると気持ちが吹っ飛んでしまう。気持ちを持続できるかが永遠の課題。

Q：刑を終えた方が酪農に就いたり、起業するとかはあるのか。

A：いるかも知れないが少ないと思う。会社で給料もらってというなら続くかも知れないが1次産業はなかなかそうならない。

Q：協力事業主の状況はどうか

A：登録社数の情報はない。事業主は保護観察所に登録しハローワークに求人を出して、刑務所はハローワークを介して仕事を紹介することになる。会社のネームバリューが落ちることを心配する事業主も少なくない。

6. 博物館網走監獄

【概要】知床が世界遺産になって観光客が増え、博物館網走監獄はゴールデンウィークに1万2千人の来館があったと網走刑務所長から伺った。博物館網走監獄は、明治以来、網走市と深く関わりを持っていた網走刑務所旧建造物を保存公開する野外歴史博物館で、網走国定公園の景勝天都山網走湖側に位置し、敷地面積は約東京ドーム3.5個分に相当する。



旧網走刑務所の移築復元または再現建築された25の建物群からなる博物館で、旧網走監獄庁舎、舎房及び中央見張所、教誨堂等8棟が明治期の貴重な木造行刑建築として国の重要文化財に指定され、裏門、煉瓦造り独居房、哨舎等6棟が登録有形文化財に登録されている。網走監獄や北海道開拓の歴史が展示されており、当時の囚人の暮らしや作業の様子が紹介されている。監獄歴史館で「島根あさひ社会復帰促進センター」のことが紹介されていたことには驚いた。

7. 北海道立北方民族博物館

【概要】1991年に開館。北方の諸民族の文化と北海道のオホーツク文化を紹介する道立の博物館である。5つのゾーンに分かれている。「北のクロスロード」には北方民族の「衣」「食」「住」が展示され、「海の狩人・オホーツク文化の人びと」にはモヨロ貝塚出土資料などが展示されている。「環境と調和した北のくらし」「北の自然の中で」では、狩猟・漁労・採集・トナカイのなどの生業活動、狩猟具やそり・船などの移動手段、クマ送りやシャマニズムなどの儀礼に関する資料、さらには子ども達の玩具、装飾品、工芸品が数多く展示されている。モヨロ貝塚の出土品の多くが貝塚館から移設されており、貝塚館にはそのレプリカが展示してある



＜所感＞

1. 地域の発展と大学の果たす役割について地域との共存に意義が共有されており創始者榎本武揚氏の意志が確実に引き継がれている印象を受けた。

中山間地を多く抱える浜田市の農業とは規模も違うし、東京農業と県立大学の総合政策とは学部も違い単純比較は出来ないが、水産学部創設もそうした観点から検討されたのだろうという思いがした。4年間の大学生活で90%以上の卒業生が満足しているとのことだが、はたして浜田に来ている大学生にとっての浜田の町の魅力、満足度は如何ほどか大変気になるところである。そうした観点からも大学を核としたまち作りを再検討すべきと感じた。

2. 視察した5つの博物館は女満別空港やJR網走駅等からのアクセスも悪くなく、広くない範囲に点在していることから1日で巡ることも可能な位置関係にある。民族博物館等では厳しい自然、海と大地の恵みの中での営みの歴史、オホーツク文化を後世に引き継ぐ強い意思を感じた。博物館網走監獄では網走刑務所の囚人労働が北海道開拓に貢献したことへの感謝と敬愛の念をも感じたが、それぞれの施設がもつ役割と特色は別々でそれぞれに興味を引くものであった。世界遺産の知床連山や阿寒、大雪、摩周湖、冬にはオホーツクの流氷という自然の観光資源と結びつけ「網走の町を知り楽しんでもらいたい」というコンセプトも市民で共有されているのではとも思えた。

網走監獄の移築には相当の経費を要したと思われるが、そうした土地柄もあってか博物館等の維持あるいは移転、新改築等に対しても議会の同意が得やすいという条件もあり、大切にすべきものとそうでないものが精査されているのだろうと思った。

3. 国は人権擁護の立場から再犯防止のために刑務施設そのものの位置付けも変化し、単なる罪を償う場から更生社会復帰のための場としての性格変わりつつある。「二度と戻ってくるな」という気持ちで送り出しているとの関係者の方々の言葉は重たく印象に残ったが、それは刑務施設が持つ本来の役割だと思う。刑務施設で努力されているが再犯で戻る出所者は増える傾向にありとりわけ高齢の再犯者が問題となっており、刑務施設と社会生活との狭間を埋める中間施設の必要性を強く感じたところである。

以上、大きくは3つの観点からもこの度の視察は今後の施策や事業を考えるうえで大変参考になった。視察を受けいれていただいた関係者の方々に心より感謝を申し上げ報告としたい。